

タイプを取り上げる理由として、彼女の言葉には他とは異なる「思考・判断・表現」の記述が散見され、それらをアウトプットするスピードが早いことを挙げる。今後の美術教育の評価の新たな糸口を探るには十分な生徒であり、可能性を感じている。それぞれの時期(各作品制作、各学期、そして年度末)におけるAさんのナラティブを通して「世界の拡張」をうかがい知れることができるのではないかと考える。そしてその作品・言葉たちは以下に分類可能である。

・個人制作 I ~ IV

奈良県主催の総合文化祭やアートコンペに出品した大型作品の制作プロセスから考察。

次章では、それぞれの制作現場から生まれた言葉たちを編み込み、どのような思考プロセスで「世界の拡張」が行われたのかをまとめたものである。

3 作品 I ~ IV(個人制作)

Aさんが勤務校に入学したのは2020年4月のことである。この頃、新型コロナウイルス感染症が猛威を振るい、学校現場にまで影響を及ぼしていた背景がある。彼女は1年次の芸術選択で「美術I」を選択したが、4月~6月まで休業期間となり、簡素な入学式の後、普通授業はオンラインでの実施となった。美術科でも例に漏れずオンラインの授業実施を余儀なくされ、ライブ配信やオンデマンド配信を併用しつつ、当時すでに勤務校に導入されていたC-Learning⁷というWebシステムを活用し、生徒たちの課題作品や感想などを収集していた。1学期末の言語表現課題として、「コロナ禍で感じていることを自由に表現し提出しなさい」という、半ば生徒たちの不満のはけ口を用意したような課題を出した際に、一際目立った提出者がいた。それが、後に2年間関わることになるAさんである。Aさんは自宅で取り組んでいた音楽活動(ギター演奏)のコード進行のメモを写真に撮ったものやお気に入りの曲の歌詞、日記調で綴られた日々の飾らない言葉、当時から得意としていたイラストレーションの断片など、他生徒の数倍もの量でリアクションしてきた。顔を名前も定かでないその表現に圧倒されつつも、休業期間が明けたら直接会って話を聞きたいと思うようになっていた。その後、約2ヶ月間の休業期間が終了し、遅れたクラス開きが始まり、授業や部活動などが少しずつ日常を取り戻してきた頃に、絵画部⁸への入部を迷っている生徒の中にAさんがいることに気がついた。友人の勧めで絵画部の扉をくぐったものの、自分には何もしたいことがないと言う彼女と初めて直接

話をし、緩やかに制作の現場へとシフトしていった。

後に話を聞くと、持病のこともあり中学時代は家にいることも多く、そこで読書に明け暮れ、作詞などの文字による創作活動にも明け暮れたという。通常の授業内で触れる言葉とは異なり、書籍や音楽からの活字情報は豊かである。すでにここで彼女の「世界の拡張」は芽生えており、少なからず表現への一歩を踏み出していたように感じた。

3-1 作品 I 『思考錯誤』

(1) 作品概要

美術Iの授業と絵画部の活動を行う中で、チュートリアル型の手法をとり、可能な限り多くのナラティブを収集した。そんな中、2020年10月に完成した『思考錯誤』⁹におけるやり取りの記録から見えてきたものを書き出したい。

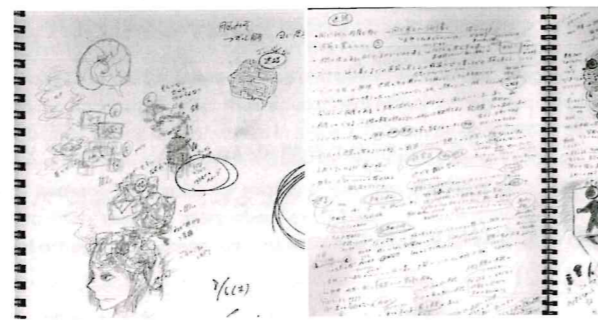


図1(左):『思考錯誤』発想段階時のドローイング

図2(右):『思考錯誤』制作段階時のドローイング



図3:『思考錯誤』完成形

図2と3はそれぞれAさんが作品を生み出す約3ヶ月間のプロセスの中でアウトプットされたものである。そして図4はその完成写真である。通常の平面作品とは異なり、ミラーシートや写真、そしてプラ版によるテキ

ストがカーテン状に設えてある。今作ではこの「文字のカーテン」が作品の肝となっており、Aさんの思考が表れている。

(2) ナラティブの記録

以下は、図4で示した作品コンセプトと「文字のカーテン」の一部である。作品制作と並行して多くの言葉をアウトプットすることに成功している。

※以下Aさんのナラティブは太字・原文ママで示す

『思考錯誤』と題したこの作品は、「感情」と「記憶」を題材とした私の初めての作品だ。白黒を基調に自分の眼や手、脳、思考のメモ等自分自身を詰め込んだこの作品は、本当の「私自身」と向き合い描いた作品である。《文字のカーテンから一部抜粋》最適解を探す旅/ゴールの無い迷路/フラッシュバック/後悔の色/混じり気移り気/思い出の混じり気/思考のグラデーション/記憶が滲む/幸せのぬるま湯/自己防衛/都合のいい解釈/自分本意な感情/記憶のデータ化/忘却と抵抗/溶かして形を変えて自分を守る/憂い儚げ切なげ/まどわりつく締め付ける苦しみ/喜怒哀楽を支配する/未熟な私達は分かっているループする/感情の水槽/思考は終わらない/ゴールだけがゴールじゃない/逃げは時に正解/思考が迷子/人生は選択の連続/0から1より100から1を/生み出すよりも作り出す/焦燥感喪失感孤独感/ゴールもスタートもない/行った証考えた証/成長した証/痛みで覚える/一生を本として思い出は葉/日記は日々の付箋/思考のメモ/思考を辞めるな脳みそを回せ/思考に溺れる/流動性回りに/矛盾...

(3) 考察

これら言葉たちからAさんの全てを見通すことは難しい。しかし、『思考錯誤』の制作プロセスの中には、これほどの思考が交差し、呼応し合っていることが読み取れる。「感情と記憶を題材にした」とあるが、それら2つの要素は常に変化するもので、形がない。その状況を作品化するため、その様をありのまま見せるという結論に至っているのではないかと。

思考を五月雨式にアウトプットすることが得意な反面、それら要素をひとつのコンセプトにまとめ上げることの難しさは課題となった。Aさんの言葉を借りるとそれは「ごちゃごちゃした思考と向き合った」と言い換えることもできるが、混沌としたビジュアルをどこまでコントロールしているかは本人にも分かっていない様子だった。しかしこれが「ナラティブを作品化する」という難題に挑戦するきっかけとなり、文字を表現ツールに変化させ、現代的な絵画作品へと飛躍することができた今作は、同年の優秀作品に選出され、全国の舞台¹⁰でも展示された。

3-2 作品 II 『がちゃがちゃ』

(1) 作品概要

前作を生み出したことから、独自の発想が作品になり得るという自信が付き、間髪入れずに2作目の制作に取り掛かった。『思考錯誤』で得た半立体的な手法を展開させ、立体(インスタレーション)型の発想を示したのは2020年11月半ばであった。次回展覧会の締め切りを2ヶ月後に控え、ナラティブのアウトプットから制作を開始していき、2021年1月に彼女の2作目にあたる『がちゃがちゃ』¹¹が完成した。

彼女は図4に示す通り、常に「制作ノート」にその時その場での感情の変化をメモとして残す癖がついていた。どの生徒・部員よりも多くの言葉を吐き出し、チュートリアルに臨む姿が印象に残っている。単純なコンセプトの可視化よりも、より複雑な人間の感情について思いを馳せることに興味関心があるように想像ができた。

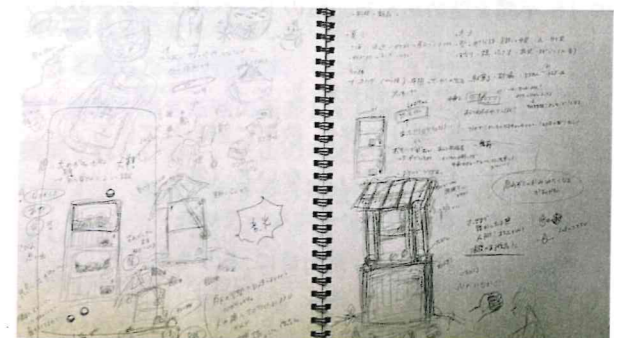


図4:『がちゃがちゃ』発想段階時のドローイング

今作は、ナラティブの要素をより強く可視化するために屏風状の支持体に言葉を書きなぐり、その中心に核となる「がちゃがちゃ機」を据えた。カプセルの中には過去の思い出の断片が封入されており、彼女の記憶の世界観が構築されている。そして今回は音と光も作品の要素に加わり、自転車通学時の環境音や心音に合わせて点滅するスポットライトなども作品の要素として重要な意味をもつように変化した。前作の反省点であった「混沌とした要素の編集」を、あえて無編集な状態で見せることにより、オリジナリティのある不思議な構造体へと展開することが可能となった。

(2) ナラティブの記録

以下は、図5で示した作品コンセプトと、屏風状のし自体に書かれた文字の一部である。より深く重たい表現も登場し、葛藤している様子が伝わってくる。